研究ノート　ニダバ (*Nidaba*) 39(2010), 155-164

句構造文法復活のために必要な概念整備

―「新言語学者／新文法家」が沈黙しただけでいいのか―

田原　薫

0．はじめに

1995年チョムスキーが大著 ***The Minimalist Program*** を発表したにも拘らず、いや発表した故に、と言うべきでもあろうが、２０世紀の残る５年間に変形生成文法は坂道を転げ落ちる石のように衰退し、世紀末には「変形」はおろか句構造を語る人さえ激減し、同様に句構造に立脚する関係文法その他の構造理論も奮わなくなり、一方では変形文法に対する批判勢力を自認したラネカーの、過度にmetaphor, metonymyに依存した論理展開も説得力不足で急速に飽きられ、結局２０世紀のほぼ後半、40年あまりにわたって虚栄を誇った「新言語学／新文法」は単なる流行にすぎなかったことを露わにしつつ、急速に歴史からも姿を消そうとしている。だが、はたしてそれでよいのだろうか。

勿論、だめな理論が衰退するのは良いことではあるが、情けないのはそれらを支持し、それに傾倒した（とりわけ日本国内の）学者どもの動向だ。流行遅れの理論を擁護しては自分が傷つくのが怖いから、ひたすらだんまりを決め込むだけである。政界用語を使えば、いわば彼らは「説明責任」を果たしていない。

句構造なんて大したものじゃない。そんなことより意味論だ、語用論だ、という研究態度とテーマを追求する人には私は何も言わない。しかし意味論や語用論を追求するにしても、句構造との関係を無視しては成り立たないし、そもそも人間の言語が１次元の時間軸に沿って素材（語）を順に並べるしかなく、それら素材どうしの間の関係の、格や法性による信号が充分に機能しないような、英語や中国語のような言語も現実に存在する以上、やはり最後の拠り所(last resort) として句構造を論じることは避けられない。

だから今は、チョムスキーという前車の転覆を見て怖じ気づき、元気のいいことを言いすぎたとの後悔からひたすら沈黙の砦に逃げ込んでいる言語学者、少なくとも英語学者も、やがて時が来れば再び句構造に向き合わねばならなくなる。その時チョムスキーへの回帰では「失われた40年」の再来になるだろう。その歴史から私が学んだこと、考えたこと、発見したことを本稿にまとめて、マニュアル風に整理して、２１世紀の後進への贈り物としておきたい。これは、すでに喜寿を迎え、言論活動ができる年数も限られてきた田原という物書きの、言語学徒への遺書／遺言のようなものである。

１．分析文法と構築文法の区別、および双方向文法の必要性

語られた文を聞き手はどう分析して理解に到っているのか、を説明する分析文法と、聞き手に理解してもらうために話し手はどのように文を構築しているのか、を説明する構築文法とは、明確に区別されなければならない。その際、文の構築が先行しなければ文が存在せず、文の分析もあり得ないから、分析文法は構築文法の部分構造を内部にもつ（痕跡の形式であれ何であれ）ことを許されるが、逆に構築文法が分析文法の部分構造を内部に取り入れることは許されない。そんな文法は予定調和論でありtautology になるか、せいぜい循環論法に陥るだけである。チョムスキー流の所謂ＶＰ内主語仮説やｖＰ内主語仮説がそうだった。そして、彼らの説明原理「ｃ統御偏重」主義、つまり分析文法で何もかもｃ-commandという位置関係に訴えて説明する性癖が、今度なすべき仕事が構築文法の建設であることを忘れて（或いは最初から自覚なしに）惰性的に続けられたのである。

さて、もし構築文法と分析文法を統一した双方向文法というものが必要だとするなら、「ｃ統御偏重主義」は当然反省しなければならないし、構築文法段階でそれに代わる概念を整備しなければならない。そしてそんな構築の結果出来上がった文はスムーズに分析の過程に送られて用を果たさねばならないから、文の構造は充分な palindromy 「回文性」（翻転／裏返し可能性）を具えていなければならない。つまり「前から読んでも後から読んでも」読み出し内容に或る程度の相似性が必要なのである。

１．１　構築文法に重要な「古参統御（veteran-command)」の概念

分析文法に大活躍したｃ-commandという関係は、或る文成分Ａがその結合相手Ｂおよびその子孫（部分集合）Ｃに影響を与えるというものであった。構築文法では文成分を下から積み上げていくのであるから、当然下（Ｃ）から上（Ａ）に影響するという思想が必要になってくる。その関係を「ＣはＡを古参統御する(Ｃ veteran-commands Ａ)」という。つまり、より早く意識に登場させた成分がその後輩に影響すると見るのである。

図１ａ.　　ｂ.

```
○ — Ｂ — □          □ — Ｂ — ○
 ＼Ａ ＼Ｃ            Ｃ／ Ａ／
```

図１ａは分析文法で Ａ ｃ-commands Ｃ の関係を表わしたものであるが、同じ図は構築文法で Ｃ veteran-commands Ａ の関係をも表わしている。古参→新前の順序が自然に読み取れるように図１ｂ. の順に書けば納得しやすいであろう。「なーんだ、そんなことならＣ is ｃ-commanded by Ａと受動態で言えばすむじゃないか」などと軽蔑したい向きもあろうが、構築文法ではＣがＡに与える影響を重視した能動表現も必要なのである。

では「 Ａ ｃ-commands Ｃ 」にあたる、Ａを主語にした構築文法での言い方はどうかというと、「ＡはＣに新前服従する。Ａ recruit(/rookie)-obeys Ｃ」である。veteran-command, recruit-obey はそれぞれ短くｖ-command, ｒ-obeyと表現してもよい。要するに、古参成分が新前成分より偉いのであり、前者が統御し、後者が服従するのである。

１．２　主語を構築現場に早く登場させるＳＯＯＴｈの理念

前分節からの自然な帰結として、文の主語候補を他の項より早く登場させるという発想が導き出される。当たり前のような話だが、チョムスキーの理論ではそうではなかった。ＶＰ内主語仮説でもυＰ内主語仮説でも他動詞の主語候補は目的語候補などより上部に、つまり構築文法の立場ではより遅れて導入されたのである。だからそこから生じるいろんな矛盾を解消させるための詭弁を余儀なくされ、彼らは信用を失墜した。対して新しい構築文法では、主語候補を抽象的な叙述力の乗物Ø述語の指定辞として、他の項より先んじて導入される。新句構造文法ＳＯＯＴｈというのは Subject-Occurs-Originally Theory（主語初頭生起説）の頭文字を取って付けられた名称である。

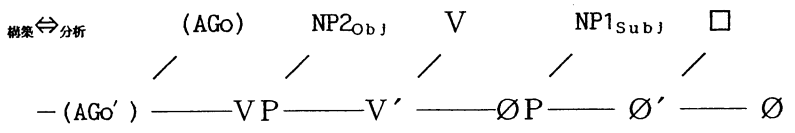
なおこの際言っておきたいのは抽象的な述語「Ø」の読み方である。ゼロと読むのは許せるにしても、出来れば（ドイツ語を知っている人なら）［ø:］つまりÖのように読んで頂きたい。そして öde Prädikat=「空（虚な）述語」の頭文字と思ってほしい。つまり、叙述力という大地のみあって、そこに具体的内容という住人が住んでいない状況を想像して頂きたいのである。そこには**事件記述／属性記述**という素性が乗り込む。今のところこういう素性は上記の二者択一を想定しているが、もし将来研究者が必要と感じられるなら、中間的な**習慣／傾向記述**という段階を導入されてもよい。

２．主語候補と色々な述語との対応関係

チョムスキーは ***The Minimalist Program*** の第３章その他随所でＶＰ内主語仮説を提唱し、同じく第４章でυＰ内主語仮説を提案したが、それはいずれも他動詞を主辞とする文の始発末端構造での主語候補と他動詞の構造的関係であった。しかし主語というものは、要するに何かの叙述をする他の大部分の文にも出現するから、もっと中立的な文構造に早く出現させなければならない。そこで、文構築の最初の（根源的）述語Øの指定辞として生起させた主語候補と上位の述語との関係を調べてみよう。

２．１　順序としておかしいが、まず**他動詞構文での位置関係**から見ていく。

図２



構築文法で終わってしまうならば左から右へと構築が進むように書いた方が明解だが、双方向文法を目指しているので、構築⇔分析で読む方向を示しておいた。最初にØと結合する□は文の構築が始まるまでの既成情報や、叙述が成立するための条件を規定する語句であり、ない場合もある。次に現れる最初のＮＰが添字で示されたように主語候補であり、Ｖから見れば直属の項でなく、最大投射ØＰを挟んでその指定辞の地位にある。

さて、上記の主語候補の位置こそＳＯＯＴｈ(Subject-Occurs-Originally Theory)の名の由来でもあるが、この文法では「すべて項は指定辞である」という立場を取るので、Ｖ（他動詞）の指定辞として２番目に現れるＮＰが添字で示されたように目的語候補になる。図３は目的語を１個しか取らない普通の他動詞構文の場合であり、 give など間接と直接の２個の目的語を取る動詞の場合はＶの投射の段階を増やす（→Ｖ″）などの措置が必要になるが、Dative Shiftなど難しい問題が生じるのでここでは論じきれない。

構築の最後に現れる(　)で括ったAGo は抽象的な形容詞であって、$NP2_{Ob}$の（Ｖから見た）θ役割を確認し、もし条件に適えば自分自身が対格(accusative)を帯びるとともに、Ｖとの共同作業によって挟まれている$NP2_{Ob}$にもその対格を伝染させる仕事をする。それによって$NP2_{Ob}$はその場を動かず、対格を帯びた目的語に昇格するのである。

もし何かの力によってAGo の働きが阻害されたり、AGo が別の（たとえば難易）形容詞に取って代わられたりした場合は、$NP2_{Ob}$は対格を帯びることができない。またＶの痕跡は格付与の力がないから、ＶがAGo に吸収されてしまえば、やはり$NP2_{Ob}$には格がない。以上のことは難易文や受動構文の成立を説明する原理となる。

２．２　格付与／格認可に必要な引率(いんそつ)・配率(はいそつ)・挟み統率の概念

図３

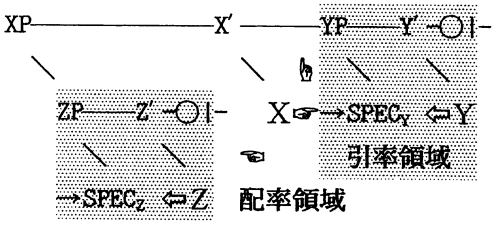


図３のような構造でＹ、Ｘ、Ｚは動詞・形容詞などの述語とする。それに対して$SPEC_Y$, $SPEC_Z$ はそれぞれＹ、Ｚの指定辞でありNPである。ここで述語Ｘから見てＹＰと$SPEC_Y$ とＹ、つまり右側の網かけを付けた部分をＸの引率領域と呼ぶ。またＺＰと$SPEC_Z$ とＺ、つまり左側の網かけを付けた部分をＸの配率(はいそつ)領域と呼ぶことにする。後者の方は使役構文などに必要になるだけだから、今問題にしたいのはＸの引率領域である。ここでＹの指定辞$SPEC_Y$ は当然Ｙにｖ-commandされており、だからＹに配率されていると言えるが、上位の述語Ｘの引率領域にも入っている。いわばＸに引率されている(in-sorted by Ｘ)わけである。このように上下の述語から影響を受けることを「挟み統率されている」ということにする。これは先程述べた目的語の資格のチェックに絡んでくる。

ここで図２を回顧して頂きたい。図２で$NP2_{Ob}$は他動詞Ｖと、θ役割をモニターする抽象的形容詞AGo とに挟み統率されて(tongs-sorted by Ｖ and AGo)いることになる。主語にはどんなθ役割をもった項でもなり得るからθ役割のチェックは必要ないが、目的語項には受動的な巨視的役割(macrorole=RRGの用語）のチェックが必要なのである。

２．３　目的語候補が文主語になる場合の一つ＝受動構文生成の機構

図３で、Ｚの領域は無視して、○をØＰ、ＹをＶ（他動詞）、ＸをAGo として取り出して書くと結局図２が得られるが、そこで具体的に$SPEC_Y$=$NP2_{Obj}$ を a picture とし、Ｙ＝Ｖをpaint / break であるとしてみよう。その上に掛かるθ-role checker は AGoのままでよい。もちろん厳密にはＶが paint の場合と break の場合とではθ-role が異なる。paint の目的語は**結果／産物**であり、 break の目的語は**被変化物**であるが、 Van Valin らの提唱するＲＲＧ(Role and Reference Grammar) ではそれらのθ-roles を統一する概念をもっている。それは **Undergoer（受動者）**という巨視的役割である。

そこで、今の場合 AGoは a picture が受動者であることをチェックする、と考えれば、他動詞paint / break に対して受動者にふさわしい格、すなわち対格を帯びることは当然であり、その格が他動詞とAGo に挟み統率されたa picture にも浸透する、という説明も納得して頂けよう。以上が他動詞能動構文の生成過程の一部である。

それでは受動構文生成の機構はどうか、という疑問が出て当然である。今、話を標準平均欧州語つまりロマンス系とゲルマン系の現代の印欧語にしぼれば、それらは動詞派生形容詞の一種である過去分詞(p.p)という範疇をもっていて、それとcopula（静態的copula =seinと 動態的copula =werdenとを使い分ける言語もある）とを併用して表現する。この場合、過去分詞が動詞活用表に載っているという理由でこれを動詞と考えてはならない。過去分詞は明確に形容詞であり、構築型句構造文法では形容詞AGo の位置に他動詞が編入（吸収合併）されて成立したもの（AGo+paint/ break）である。

図４

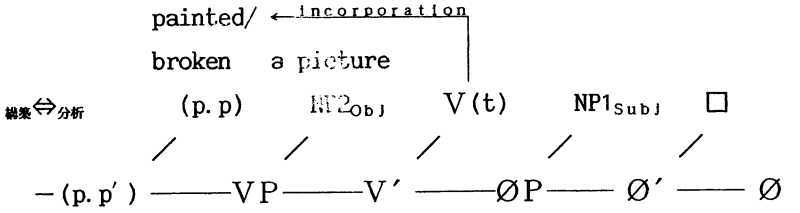


図４でＶが痕跡つまり無音になれば$NP2_{Obj}$はもはや挟み統率されていないから当然対格を認可されることはなく、過去分詞自身も他動詞にｖ-commandされていないから対格を帯びることはない。従ってこれらの成分は何かの手段で別の格（具体的には主格）を獲得しなければ音声表現を受けられない。格への要求は$NP1_{Subj}$ の処遇に優先する。だから主語として$NP2_{Obj}$が選ばれ、$NP1_{Subj}$ の方は黙殺されるか、もし表現の必要があれば何らかの斜格を認可されて表現される。大まかに言えばこれが受動構文生成の粗筋である。

受動構文の場合は以上のようにまずＶが AGo位置に上昇合体し、過去分詞という複合的範疇になって$NP2_{Obj}$をｖ-commandもtongs-sortもしなくなるから、$NP2_{Obj}$に認可したθ役割は残るが、$NP2_{Obj}$も過去分詞自体も「脱対格化(de-accusativized)或いは格漂白(Case-bleached)」される。次節ではAGoの力が奪われる別のケースを考察しよう。

2．4　AGo が有音の性状形容詞に代わった場合の構文

前分節では他動詞であるVが一旦生起した末端構造から、それがAGo に吸収合併されることによって生じる二次的形容詞構文、つまり受動構文を考察した。もし最初からØ述語の素性が「属性記述」で、動詞として振舞う成分がなく、Øの指定辞たるNPが直接有音の形容詞たとえば blue とか warm などをｖ-commandしているような「本来の」形容詞構文を考察しよう。一般にそれら一次的形容詞は対格の補充要素を取らない。もちろん語彙によっては前置詞を介して斜格の補充要素を必要とするものもある。たとえば equal to … とか different from… , void of… などがあるが、対格を取るものはない。もし斜格補充要素が必須ならば、それらを句構造の直上位に取り付けてｒ-obey させればいいから、今は深入りせず、単純な、例えばパンが固いという場合の hard などを考察する。

図５

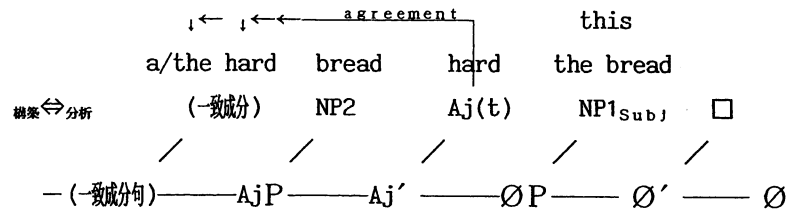


図５はかなり複雑で、わかり難さをお詫びするが、物の属性を記述するのに２通りの方法がある。一つは The bread is hard. のように述語的(predicative) 形容詞を使うやり方で、英語ではもちろん主語（候補）と形容詞との性数の一致(agreement) はなく、ドイツ語でも形容詞は原形／辞書形におかれるが、ゲルマン語全体がそうというわけではなく、少なくともデンマーク語・スウェーデン語では共性（古い男性と女性が統一されたもの）と中性と複数とで異なる語尾を取る。ロマンス諸語【ルーマニア語では中性の名残りがあり、ちょっと複雑なのでここでは考慮の外へおく】では男性・女性・男性複数・女性複数で一般に異なる語尾を取るが、上記の、主語（候補）と述語的形容詞との一致現象を起こす諸言語においては、一致現象を引き起こすのは名詞（図５では$NP1_{Subj}$)であって、形容詞の側は名詞側の要求に従うだけである。だから構築文法の立場では$NP1_{Subj}$ の方がAjよりも早く導入されねばならない。つまり$NP1_{Subj}$ が Aj をｖ-commandする図式が必要なわけである。主語を遅く導入するｃ統御偏重主義の変形文法が駄目な理由でもある。

さて、英語の場合は形容詞と名詞との関係が述語的(predicative) であれ修飾的（或いは連体的=attributive) であれ、表層的な一致の現象がないので、議論はそこでストップする。ロマンス諸語の場合はどちらの場合も一致の現象を起こすので、これを処理するのもいわば比較的単純である。しかしやや面倒なのはドイツ語であって、述語的用法の場合は語尾変化のないいわば辞書形、修飾的用法の場合は強変化・弱変化或いは混合変化などと性・数・格によって決まった語尾変化をつけて使わねばならない。たとえば Das Brot

ist hart. に対して das harte Brot, ein hartes Brot といった例のように。

従って、英語やドイツ語のように述語的用法の性状形容詞が一致変化をしないような言語で、名詞が主語候補である場合の句構造の末端（或いは始端）構造は、まず図５のAj′より右側の部分が出来上がり、それが一つ上（左）のAjPの段階になってもそこに指定辞として NP2が付くと考える必要はなく、Aj′ はそのままAjPに昇格する。

逆に、ロマンス諸語の場合は$NP1_{Subj}$とAjとの間で早くも一致現象が発動すると見なすことができる。sp. El pan es duro./el pan duro のように。もちろん前者は述語的用法の例であり、後者は修飾的用法の例であるから、前者では主語候補$NP1_{Subj}$が離れて実際の文主語の地位まで上昇しているわけであるが、要するにどちらも早い段階で一致或いは一致の予約がなされている、と考えて何ら矛盾はない。

ところで問題のドイツ語であるが、構築段階 Aj′までは das Brot－hart のNEXUS であるから、仮に一致があったとしても潜在的な予約の段階に留まる。これを顕在的な一致の形として実現するためには、$NP1_{Subj}$ をNP2 の地位まで昇進させてその性類・数・定性などを確認し、それに合う適切な語尾変化を選ばなければならない。そのような加工が施された段階の句を仮に図５では「一致成分句」と名付けておいた。もちろん「一致成分」という抽象的な範疇を主辞とする句という意味ではない。一致現象を主導するのはあくまで名詞であるから「一致成分句」というのは構築段階の名称である。

なぜこんな複雑な手続きを考えるのか、まだこのテーマに関わっているうちはご納得いただけないであろうが、次の難易文を考察する段階になると、難易形容詞の一致のために一旦名詞を昇進（外転=extroversion という）させて処理する必要が生じてくる。

３．被叙述項と主語の乖離および形容詞の一致対象 ── 難易文の場合

この節の表題はかつて『ニダバ』３３号(2004)にわずか２ページの研究ノートとして出した記事の表題と同じものである。その記事はむろんチョムスキーの変形文法の批判をも狙っていたが、直接にはむしろラネカーの認知文法の批判に当てられている。ラネカーは 'Raising and Transparency' と題して ***Language*** Vol. 71, No. 1 (1995) に掲載された論文で、たとえば難易文は《主語の側で起こった metonymy と、それに必然随伴あるいは適応する述語の多義化によって起こる現象》だ、と主張した。たとえば

1. (For John) To fix Volkswagens is $easy_1$.
2. Volkswagens are $easy_2$ to fix.　「フォルクスワーゲンは修理しやすい」
3. When it comes to fixing them, Volkswagens are really $easy_2$.

例文の 2. がいわゆる難易文であるが、彼によれば 1. の主語不定詞の中で最も目立ついわゆる 'trajector' がVolkswagens なので、それが不定詞句を代理する metonymy を誘発して 2. の 'trajector' つまり主語になり、それに適応して、本来「こと」を叙述する $easy_1$ が「もの」(=Volkswagens)を叙述する $easy_2$の語義を派生した、という。

しかし何ぶん easy が語形変化による一致の現象を示さないので、例文 2. において、はたして$easy_2$ がVolkswagens を叙述しているのか／それとも to fix を叙述しているのかは定かでない。またなぜ1. からJohn is $easy_3$ to fix Volkswagens. といった、能動者を主語に立てた難易文ができないのか、という理由も定かではない。

3. は「修理することに関しては、フォルクスワーゲンは実に楽だ」という意味であり、ラネカーが、$easy_2$ は「もの」を主語としてそれを叙述するために独立して使える、という主張の証拠として挙げた文である。しかし 3. は主副両節文からなる談話であり、前の副節文は主語でなく「話題」を設定するための典型的な構文の一種である。it comes to に後続する fixing them がその「話題」にあたる。だから最後の述語 $easy_2$は「もの」＝主語ではなく「こと」＝話題について叙述しているのだ、という疑いは晴れない。

３．１　なぜ動作主は難易文の主語になれないか

John is $easy_3$ to fix Volkswagens. というような難易文が存在しないのは、単に英語という個別言語の特性なのではなく、広い通言語的な言語の原理と言ってもよいが、そのことはＶＰ内主語説やｃ-command偏重主義の変形文法でも、metonymyに頼りすぎる認知文法でも説明がつかなかった。実は、他動詞の目的語（候補）を指定辞の位置に発生させること、つまりＳＯＯＴｈの句構造を採用すれば、もともと低いØ述語の指定辞である主語候補よりも目的語（候補）の方が高い位置にあり、ＶＰの中でそれが最高の地位にあると言える。ただし上に AGoが掛からないので、まだ対格は帯びていない。対格の認可に必要な AGoが難易形容詞(AE/H)に取って代わられた句構造を検討してみよう。

ここで改めて図を挙げるが、図５までの今までの図は、変形文法との対比に便利なように右から左へと構築が進行するように書いていた。図６からは構築文法であることをより意識して、左から右へと構築が進む型に変えることにする。図６は他動詞構文の典型的なＳＯＯＴｈ型句構造である。

図６

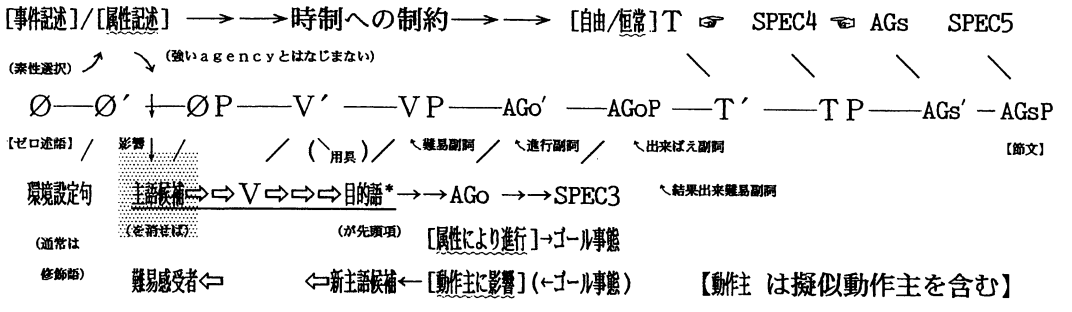


図６でＶＰの成立の難易度を表現する必要があればＶＰの段階で easily などの難易副詞を付加詞（つまり投射の段階を上げない修飾語）として付け足せばよいが、副詞では叙述の焦点として頼りない、焦点化するために形容詞を使いたい、という表現欲求が起こっ

た場合、図６のAGo の上に easy, hard などの難易形容詞が覆い被さって、AGo の（θ役割確認機能だけは残すものの）対格認可の能力を抑え込んでしまう、と考える。いま難易形容詞をAEH と書くことにして、それがAGo に取って代わった図を図７としよう。

図７

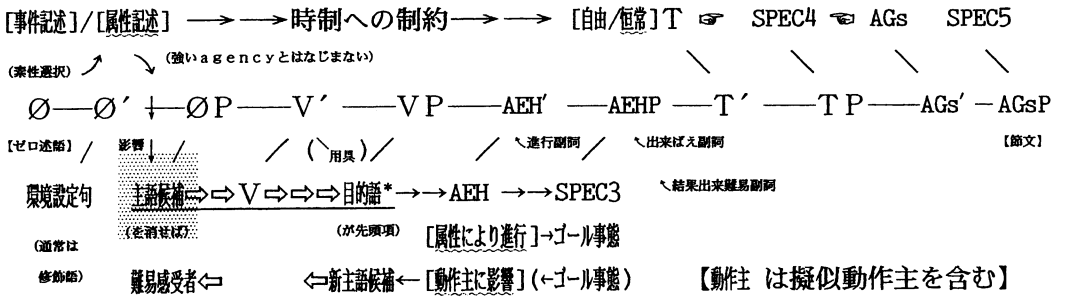


図７でＶＰの指定辞つまり最高位の項となっている「目的語*」というのは、あくまで候補ということであって、これを引率しているAEH の影響を強く受ける。また「目的語*」の方もAEH に影響を及ぼし、ここで両者間に同格の予約と性・数の一致の予約がなされると考えることができる。問題は図６のAGo の場合と違ってAEH には格認可の力がない、ということである。だから図７の「目的語*」はまだ対格も、もちろん主格も帯びていない。このままの位置では格も一致も顕在化できないので、AEH の働きによって「目的語*」は一つ上の段階の指定辞SPEC3 へといわば放り上げられる。こういう現象を外転(extroversion)といい、放り上げられてできた項を配上語(superject) という。

このSPEC3 もまだ格認可を受けていないことに変わりはない。しかしＳＯＯＴｈでは主語のもつ主格という格は項（ここではSPEC4 ）が時制詞Ｔと主格資格述語AGs に挟み統率（☞☜）されることによって認可されると考えるので、SPEC3 がＴに近づきＴに引率される位置まで到達したということは、主格を認可される可能性が高くなったということを表わしている。だからAEH の「主語」として振舞える資格がかなり身に着いたといえよう。かつて予約にすぎなかった一致現象も一段と実現に近づいたといえる。

こんな一致現象が真に音形を伴って実現するにはSPEC3 がSPEC4 へと外転して、挟み統率によって主格を認可されることが不可欠である。だがそれで「めでたし、めでたし」ではない。しかし図７を見れば、ØＰの指定辞である主語候補が難易文の主語になれないことは納得して頂けよう。主語候補は動詞の直属の項ではなく、AEH からもあまりに遠い。

３．２　難易形容詞の一致対象はなぜ「こと」から「もの」に移ったのか

図７のそもそもの出発点はＶＰすなわち「フォルクスワーゲンを修理すること」のような「こと」の難易を叙述するためにＶＰの姉妹としてAEH を置いたことであった。だからAEH の一致現象の相手は to fix Volkswagens であり・いわば「こと」性つまり中性であるのが論理の要求に適っている。しかし英語以外の、たとえばスペイン語では、仕上がっ

てきた難易文は、「こと」ではなく目的語候補出身の主語と一致している。

4. Este libro es fácil de leer. (This book is easy to read.)

5. Estos libros son fáciles de leer. (These books are easy to read.)

これらの例で fácil/fáciles (=easy)は 読むべき本と数に関して一致している。

この現象を説明するのに、ラネカーのように「本が読書という局面ではtrajector であるから metonymy の作用で主語になった」などという説明は循環論法であり、説明になっていない。同じ論文の別の箇所で彼は「人間で動作主である項は優先的にtrajector になりやすい」とも言っているので、John is easy$_3$ to read these books. という型の難易文ができないこととまったく矛盾している。

筆者提唱のＳＯＯＴｈでは次のように考える。要するに（主語候補でなく）目的語候補こそＶＰレベルでの最高位の項であり、対格認可述語AGo と置き換わって現れる難易形容詞にもともと隣接する地位にあったのだと。だからたとえ真の叙述対象が「こと」であっても、ある程度言語のもつ機械的な力学に従って、主語になった項と一致するのだと。

まだ言い足りない点もあるが、今回は一応これで納めることにする。

参考文献

☆は、いずれも執筆者は筆者＝田原　薫　である。長くなるので副題は省略する。

☆(1997)『ニダバ』第２６号　「ゼロ述語から出発する句構造文法」

☆(1999)『ニダバ』第２８号　「英語の中間構文を支える句構造」

☆(2003)『ニダバ』第３２号　「新句構造文法と補文Ｗｈ痕跡問題など」

☆(2004)『ニダバ』第３３号　「英語学のための句構造説最終決着版」

☆　〃　〃　〃　「被叙述項と主語の乖離および形容詞の一致対象」

☆(2005)『ニダバ』第３４号　「「カリスマつまみ食い」論文作法の戒め」

☆(2007)『ニダバ』第３６号　「句構造論の存続適性を分ける分水嶺」

☆　〃　〃　〃　「Chomsky[1995], *The Minimalist Program* (The MIT Press): Review Ⅰ」

☆(2008)『ニダバ』第３７号　「Chomsky[1995], *The Minimalist Program* (The MIT Press): Review Ⅱ」

☆(2009)『ニダバ』第３８号　「再帰態・中間態・許容再帰中間態の機能」

参照文献

★Chomsky[1995], ***The Minimalist Program***, The MIT Press

★Langacker(1995) 'Raising and Transparency'. ***Language*** Vol. 71, No. 1, pp. 1~62